伝道ブックス88

# 終活と宗活

雲井　一久

# 目次

■はじめに―終活と宗活― …… 1
■何を宗として生きているのか …… 4
■死の自覚 …… 12
■老・病・死を抱える身 …… 17
■大きな方向転換―曇鸞大師の歩み― …… 23
■仏さまからの呼びかけ …… 32
■「長生不死」の欲求 …… 37
■無量寿・無量光の世界 …… 43
■丁寧に生きる―本当の終活・宗活― …… 48
あとがき …… 56

【凡例】

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

## ■はじめに―終活と宗活―

高齢化社会の中にあって、昨今、「終活（しゅうかつ）」という言葉が出てきました。その要因としては、核家族化や相続の問題など、さまざまにあるのでしょうが、何か先行きが見えない時代社会の不安が背景にあるように感じています。自己責任という言葉が象徴するように、人に迷惑をかけないように何事も自分で決めていくことが求められ、自分で自分の死後のことまでも決めてゆかねばならない。「終活」という言葉に、そのような切迫した意味が込められているように感じるのです。そしてその「終活」と、何を大事にして生きるのかという、人生のよりどころ、「宗（むね）」の問題が、大きく関わってくるように思うのです。ですから「終活と宗活（しゅうかつ）」

という題を出させていただいて、そのことをたずねたいと思います。

まず、「終活」について、皆さんはどういうイメージをお持ちになるでしょうか。世間では、身辺整理とか、死んでいく前の身支度を指す言葉として認識されているようです。

一方「宗活」ですが、これは何か特定の宗教を信じる「宗教活動」のことではありません。この「宗活」の「宗」という字を辞書で調べますと、中心とか尊敬という意味があります。

「宗」という文字は、「宀」と「示」で成り立っています。「宀」は家の屋根を表します。そして「示」の「丁」は祭壇を表し、「八」は人を表します。家の中心に祭壇があって、それに人がかしずいている様子を



表す象形文字なのです。つまり、真ん中に尊ぶべきものがあって、人が頭を下げている文字なのです。そこから、中心とか、尊ぶべきものを「宗」というのです。

ですから、この「宗」は特定の宗教を表して言うのではなく、人生にあたって私たちが何を大事にしてきたのか、何を大事にするのかという問題になります。そして、この人生の「宗」を自ら問い、あるいは求めることを「宗活」という言葉で表現したいと思います。

多死社会を迎えることや、最近では、新型コロナウイルスの蔓延や戦争、宗教に関する問題が露呈し、ますます不安が増しています。今、時代の行き詰まりを誰もが感じているのではないでしょうか。その行き詰

まりと不安の只中にあるからこそ、私たちは何を大事にしてきたのか、何を中心にして生きていくのかを問い返さずにはおれないのでしょう。そして、それが死に向かって歩いている、私どもの最大の問題として、「終活」ということと重なってくるのです。

これから、「宗活」「終活」をキーワードに、親鸞聖人の御教えにたずねていきたいと思います。

## ■何を宗として生きているのか

人生において、信頼に足るもの、確かなものとは、何でしょうか。私たちは今、先行きが見えなくて不安だと言っています。不安とは何かと



いうと、いまだ来ない現実に恐れ慄いていることを不安というのです。そして、不安が現実になると苦悩という形をとります。ですから、不安は現実ではないのです。現実ではないにもかかわらず、不安が起こると、我々はそれに翻弄されてしまいます。言い換えれば、確かでないから不安なのです。しかし、矛盾するような言い方ですが、何か確かなものを求める心だけは、確かではないかと思います。

そこで、何を確かなものとして生きていくのか——です。私たちは無意識のうちに、何かを頼りに、よりどころにして生きています。これが、「宗」ということです。何をよりどころ、「宗」として、今まで過ごしてきたかということが問題となるのです。

例えば、「自分」という存在を考えてみたいと思います。自分、自分と言いますが、何かをよりどころにしないと「自分」を証明することはできません。他者がいるから自分が認識されるのです。

会社に勤務している人は、会社員ということを宗(むね)として、会社員としての自分を証明している。学生の方は、「私は学生だ」とどうして言えるかといったら、学校があって、そこに通っている学生の立場としての自分を、「自分」としているわけです。関係性の中で自分を見出して、それを「自分」の存在の証明としているのです。言い換えれば、自分以外をよりどころにして、「自分」を認識させている。実は「自分」とは、自分以外のもので決められているのです。



ですから、私たちは自分以外のものを根拠にしないと「自分」という存在を受けとめられないとも言えます。人生の中において折々にその根拠を変えて、私たちは一生を過ごしていると言ってもいいと思います。

昔は、村という共同体が一つのよりどころになっていました。村にはいろいろな掟(おきて)や決まりごとがあり、そういうものが村に住む人々のよりどころになっていました。私の住んでいるところには、町を囲むように大きな山があります。昔のお年寄りは、死んだらその山に帰っていくのだと言っていました。そういう物語を信じて、よりどころとしていたのです。

しかし、科学が発展し、理論上そんなことはないと示されると、山に対する言い伝えは、信じられなくなりました。人間が人間の考えに依(よ)っ